

探究心が未来を拓く。

研究職 採用案内 | RECRUIT GUIDE

防衛装備庁



採用に関するお問い合わせ



防衛装備庁 長官官房人事官付 採用担当

〒162-8870 東京都新宿区市谷本村町5番1号

TEL 03-3268-3111(内線番号 35168)

HP <https://www.mod.go.jp/atla/saiyou>

*本採用案内は令和7年3月に作成したものであり、その時点での情報を掲載しています。
*本採用案内に掲載されている写真・文章などの無断転載・複写を禁止します。



探究心が未来を拓く。

Message

我が国・日本が目指すべき道である「平和主義と専守防衛」を貫くため、

国民の幸福の基盤である「生活と財産の安全」を守るため、

防衛省と自衛隊の存在意義は、かつてなく高まっています。

そして、その防衛省・自衛隊の重要な活動基盤の一つである防衛装備品に関して、

政策の企画・立案、調達、研究開発を担っているのが、防衛装備庁です。

わたしたち防衛装備庁の研究職は、国内外問わず新たな知識と技術を探求し、

世界最先端の科学技術を研究・駆使することで、我が国の国防の一翼を担い、

貢献します。すべては、我が国の平和のために――。

わたしたち研究職は、研究開発への情熱のもと、未来を切り拓きます。

Contents

01	コンセプトメッセージ	11	事業紹介02 [スタンド・オフ・ミサイル]	19	事業紹介04 [次期戦闘機]	27	他省庁への出向職員
03	研究の流れ	13	職員紹介02 / 研究所	21	職員紹介04 / 研究所	28	海外への留学職員
05	防衛装備庁の任務 [ミッション]	14	職員紹介02 / 開発官	22	職員紹介04 / 事業監理官	29	キャリアステップ
07	事業紹介01 [レールガン]	15	事業紹介03 [UUV(水中無人機)]	23	研究所紹介	31	福利厚生
09	職員紹介01 / 研究所	17	職員紹介03 / 研究所	25	試験場	33	募集要項
10	職員紹介01 / 事業監理官	18	職員紹介03 / 開発官	26	支所		

研究の流れ

防衛装備庁では、我が国の平和と独立を守る陸・海・空各自衛隊が求める防衛装備品の研究開発を計画的に実施し、激変する世界情勢に対応する装備品の将来構想と将来の運用ニーズ・技術シーズを踏まえた研究を推進しています。開発においては、研究成果や過去の開発教訓を踏まえた試作開発及びその評価試験を行っています。

防衛装備庁における研究職技官の役割

研究職技官は、防衛装備品の研究開発に係る業務に幅広く従事する中で、主に次の4つの役割を担っています。

01

我が国の平和と安全を堅守する使命を持つ研究者として、基礎的知識と技術を十分に習得した上で、先進技術を駆使した研究開発及び技術行政に関わっていく役割。

02

大規模なチームをコミュニケーション力と統率力でまとめるプロジェクトリーダーとして、次の時代の装備ニーズを予測し、困難な開発課題を乗り越えていく役割。

03

幅広い知見と業務経験を有した行政官として、他省庁とも密接な対話と連携を図り、防衛装備庁の開発・運用ノウハウを活用した効率的な技術行政を進めていく役割。

04

たしかな語学力や国際的視野を備えたグローバルな人材として、諸外国との交流をはじめ、重要性の高い国際共同研究開発、装備・技術移転の場で活躍していく役割。



装備品の研究開発

■ 将来構想

技術的シーズや運用上のニーズから装備品の将来構想を描きます。

■ 開発

各自衛隊等のニーズを踏まえて、開発及び試作品製作を行います。



将来構想
Planning

研究
Research

開発
Development

試験評価
Test & Evaluation

■ 研究

装備品の創製に必要な要素技術について研究します。



■ 試験評価

設計基準の機能・性能を満たしているか、試作品を試験評価します。



防衛イノベーションの 実現に向けた新たな研究所

防衛イノベーション科学技術研究所



上記の流れで装備品の研究開発を行う研究所に加え、我が国の防衛や社会の在り方を大きく変える成果の創出を目指す研究所として、防衛装備庁は2024年10月に防衛イノベーション科学技術研究所を創設しました。

Innovation



防衛イノベーション科学技術研究所は、恵比寿ガーデンプレイスタワーにオフィスを置き、以下のコンセプトで、これまでとは全く異なる研究成果の創出を目指していきます。

- 既存の研究開発の枠組み・思考から脱却
- 従来の常識を覆すブレークスルーへの挑戦
- 様々な可能性を有する科学技術の探索・活用

防衛装備庁の任務

「ミッション」

Mission

新時代の安全保障に、 防衛装備庁ができること。



防衛装備品の適切な確保と進化。
多岐にわたる課題解決に向け、
より効果的な防衛装備行政の
構築のため設立。

防衛装備品の適切な開発・生産・維持整備は、我が国の安全保障上、極めて重要です。
特に以下の4点が重要課題とされています。

- ①諸外国との防衛装備・技術協力の強化／②安全保障環境を踏まえた技術的優位の確保
- ③防衛生産・技術基盤の維持・強化／④防衛装備品のハイテク化等を踏まえた調達改革

また、高品質な装備品の効率的な取得や、徹底したコスト管理には、装備品の構想から維持・整備にいたるまでのライフサイクル全般を通じたプロジェクト管理強化や課題解決への体制構築が求められます。

安全保障環境を踏まえた多角的な
取り組みとさらなる体制強化。
防衛装備庁として果たすべき、
様々なミッション。

下記を重要任務として取り組んでいます。

- ①技術的優越の確保／先進技術の把握と導入、技術戦略策定、国内外の研究組織との連携等
- ②防衛装備品のプロジェクト管理／プロジェクト管理による、防衛装備品の効率的な取得
- ③防衛装備・技術協力の強化／我が国の安全保障の観点から行う、防衛装備・技術協力の推進
- ④防衛生産・技術基盤の維持・強化／防衛装備品に関わる各種基盤の維持・強化
- ⑤コスト削減と監察・監査機能の強化／コスト削減の強化。また、契約適正化に向けた取り組み

新たな時代・業務に
対応するための組織として、
防衛装備庁が目指すべき目標。
それは、抜本的な体制強化と改革。

拡大する防衛装備行政への効果的対応のため、防衛省内の装備取得に関する部門を集約・統合し、防衛装備庁を平成27年10月1日に設置。新たな時代の安全保障に向け、以下を目標としています。

- ①統合的見地を踏まえ、装備品のライフサイクルを通じた一貫したプロジェクト管理の実施
- ②部隊の運用ニーズについて装備面への円滑・迅速な反映
- ③新しい領域（防衛装備品の一層の国際化、先進技術研究への投資等）における積極的な取り組み
- ④調達改革の実現と防衛生産・技術基盤の維持・育成の両立

01

新しいことを学べる楽しさ。

現在、私は無人車両（以下、UGV）の自律走行の研究に携わっています。UGVの自律走行は認知、判断、制御の3要素から構成されていますが、それぞれに研究課題が多く、日々新しいことを学ぶ楽しさがあります。

革新的装備の研究に取り組む。

私の担当するUGVは、配備により任務遂行時の人的損耗の局限化が期待される、革新的なゲームチェンジャーとなる装備品です。一日でも早く部隊に届け現場に貢献できるよう、常に先端技術の獲得にも注力しています。

尽きることのない学びと挑戦。

もともと、新しいことを学ぶことが好きで、特定の配属希望はありませんでした。しかし、今の研究では課題に対して試したい技術や手法が多く、いくら時間があっても足りないくらい充実した日々を過ごしています。

陸上装備研究所システム研究部無人車両・施設器材システム研究室
●2018年入庁／機械工学系出身

Thoughts of the staff 職員の想い

学んだことを活かすチャンス。

実は入庁前の防衛装備庁に対するイメージは漠然としており、具体的な目標などはありませんでした。しかし、国家公務員の中では数少ない研究職として、理学・工学系の知識を活かせると思い志望したのが入庁のきっかけです。

大学時代の研究実績が活きる。

大学時代、高出力レーザの大型実験等に参加した経験があり、同様の研究に携わりたいと思っていました。入庁後は高出力レーザの開発に携わることができ、私のバックグラウンドを最大限活かせて嬉しく思います。

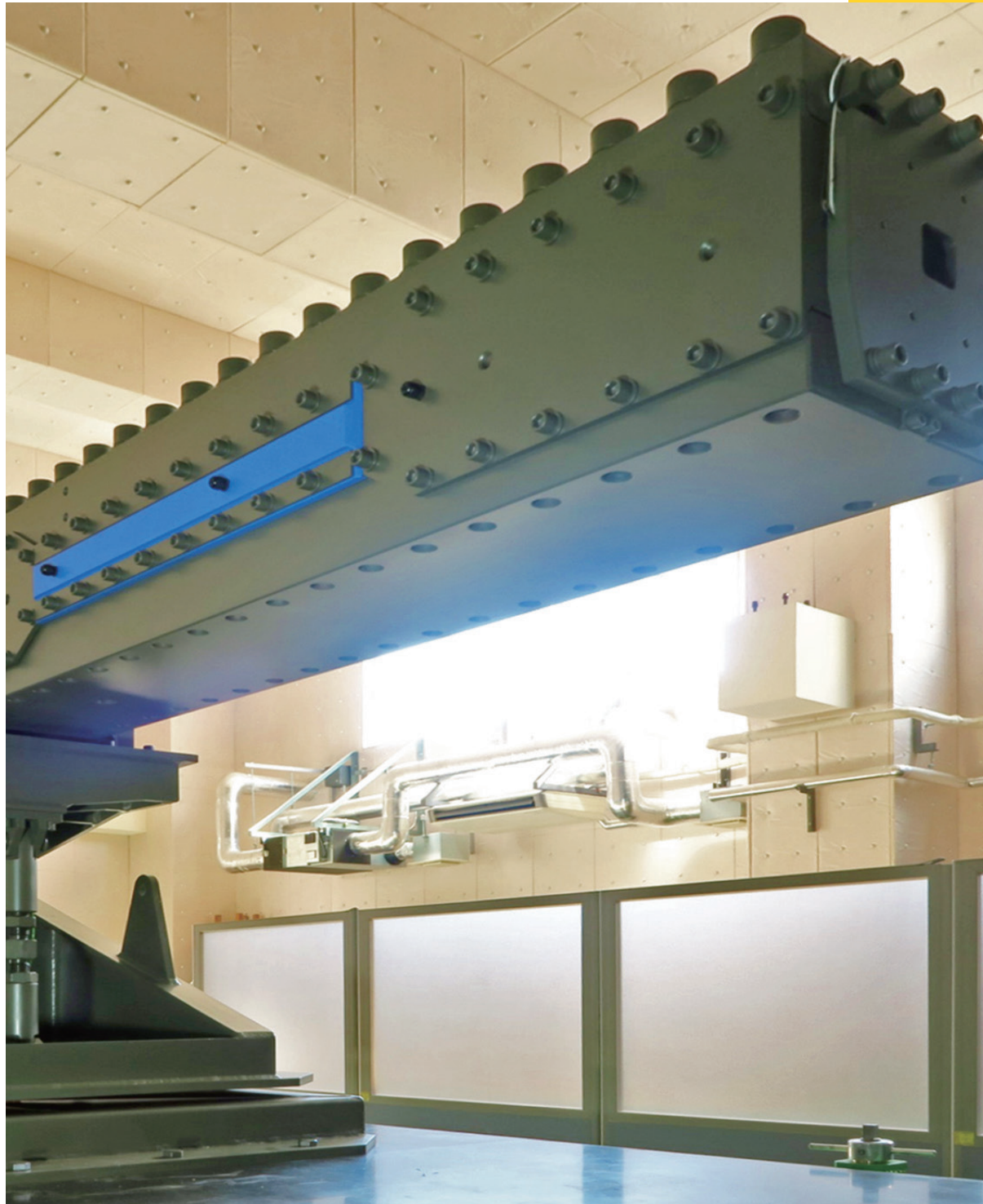
連携と調整から現場を支える。

私の現在の目標は、今携わっている高出力レーザを使いやすいシステムに仕上げ、実戦配備まで見届けることです。装備品を試作する企業様と、使用する自衛隊との良い調整役を担えるよう、先輩達から学び励んでいます。

新世代装備研究所 電子対処研究部 電子戦統合研究室
●2022年入庁／エネルギー工学系出身

02

01 事業紹介 [レールガン]



自衛隊の現有戦力として大きな役割を担う大砲。

火薬の火力で弾を発射する大砲は、自衛隊の現有戦力として大きな役割を担っています。例えば、陸上自衛隊においては戦車砲やりゅう弾、海上自衛隊においては護衛艦の艦載砲、航空自衛隊においては対空機関砲等、各自衛隊で多様な任務に用いられています。

火砲の限界を超える、次世代砲を。

民生技術の導入による、 極超音速パルスパワー砲の研究。

次世代「レールガン」研究の背景。

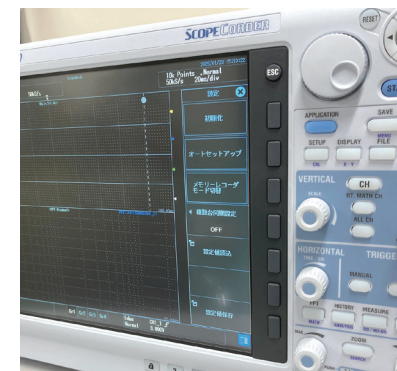
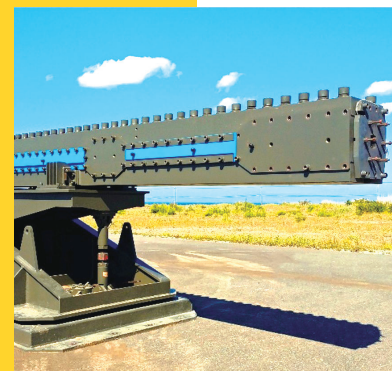
レールガンとは、電気エネルギーを利用して弾丸を発射する次世代砲です。開発の背景としては、各国が極超音速誘導弾の開発に力を入れる中、それらの想定される脅威に対処するため、極超音速誘導弾の攻撃に対する広いレンジでの迎撃の必要性が高まっていることが挙げられます。また、誘導弾等との組み合わせによる多層的な防空手段の獲得を目的としています。対空誘導弾は、遠方から迎撃可能である一方、1発あたりの単価が高く、初速は低いため、交戦機会は限られています。弾丸初速が高い対空レールガンと組み合わせることで、さらに有効な防空が期待できます。将来的には対空、対艦、対地レールガンの配備による重層的な運用を構想しています。

電流と磁場の力で弾丸を発射する「レールガン」の原理。

火薬を用いる従来砲に対して、レールガンは電流と磁場によるローレンツ力を利用して弾丸を発射する原理のため、従来の戦車砲の弾丸初速1,750m/sに比べて、2,500m/s以上の速度が実現可能です。この結果、弾丸威力の向上・最大射程の延長・目標到達時間の短縮による命中率向上が期待される将来装備品と位置づけられます。現在我が国を含め米・欧・中国が開発を進行中ですが、運用している国はまだありません。研究開発の課題においては電源の小型化と急速充電化が焦点であり、現在の単射試作品から連射化へ、さらに装甲戦闘車や戦車、艦艇等に搭載するオンボード射撃を目標に開発を進めています。

国内企業との共同開発と民生技術の活用で、早期実用化を目指す。

電源の小型化と急速充電化の実現には、民生技術の積極的な活用が不可欠です。電源の小型化には蓄電池及びコンデンサーの高エネルギー密度化、急速充電化には半導体スイッチの高耐圧化がポイントであり、これらの課題解決に向け、防衛装備庁では国内各企業との共同開発を進めています。防衛省には「安全保障技術研究推進制度」や「先進技術の橋渡し研究」など、複数の民生技術の育成及び活用の枠組みが存在します。これらの制度や枠組みにより、我が国の優秀な民生技術をフル活用することで、レールガンの早期実用化を目指しています。



01 研究所

陸上装備研究所 弾道技術研究部
火力・防護力評価研究室

●2019年入庁／機械工学系出身



To participate in a project
世界レベルの技術を見つめ、
レールガンの新発見へ。

ずっと夢だった研究開発の
道に進むために。

私にとって、防衛装備品の研究開発は大きな夢でした。そのため大学院修了後は、防衛事業に関わる民間企業へ就職しました。しかしそこでは、民生品の製造設備の設計やコスト管理にとどまり、異動もできない状態でした。どうしても研究開発への思いを諦められなかった私は意を決し、確実に研究の道を進める防衛装備庁の門を叩いたのです。現在は念願叶って、レールガンの研究に挑戦することができています。



海外の最先端技術に
触れながら、知見を形にする。

日々、学びと挑戦の連続です。レールガンの研究は各国で進んでおり、海外の研究者との交流を通じて、世界レベルの最先端技術を知る機会も豊富です。そうしてあらゆる知見を取り入れ、自分の設計した電機子が形になります。射撃試験で破損せず発射できた時の大きな達成感は、言葉になりません。設計・解析・製造・試験と一連のプロセスに携わりながら新発見を重ねる。それが研究の醍醐味だと実感しています。



当庁だからこそできる、
大規模なプロジェクト。

自分の研究開発したアイテムが、いつか実際の装備品として役立つ日を夢見ています。まだまだ課題もありますが、弾丸が極超音速まで加速できるこのレールガンは、非常に高いアドバンテージを持った装備品になると信じています。運用側の意見を取り入れながら、技術者の視点からの提案も行い、一つひとつ課題を解決していきます。このような大規模な研究開発は、当庁だからこそできることではないでしょうか。



プロジェクト管理部 事業監理官
(宇宙・地上装備担当)付

●2005年入庁／電子工学系出身



To participate in a project

最大の魅力は、
安全と平和に
直接寄与できること。

装備品に精魂を注入できる
研究職技官を目指す。

防衛庁(当時)に入庁を決めたのは、先輩研究職技官から「戦車の開発にあたり、車体重量など厳しい制限の中で火力や機動力、防護力それぞれの能力を最大化させるために、ギリギリの設計に挑んでいる」というリアリティあふれる開発秘話を聞いたことがきっかけです。その姿勢に強く惹かれ、私も先輩研究職技官のように知識や経験を高め、装備品に精魂を注入できるような研究職技官になりたいと強く感じました。



関わった装備品をカタチ
として残せるやりがい。

開発に携わった装備品等を、次の世代にカタチとして残せることが仕事のやりがいです。防衛装備品の研究開発は業務量が多く、時には難しい判断を迫られることも。困難を乗り越え開発したものが自衛隊に採用され、装備化された姿を目にすると感慨深く達成感を覚えます。自分が関わった装備品が、プラモデルやミニカーなどとして販売されているのを見かけた時も嬉しく、仕事の喜びを感じます。



受け継いできた専門知識を
次世代につなげたい。

防衛装備庁には、防衛装備品に関する多様な専門知識を持つ仲間がたくさんいます。私たちが持つ知識は先代の先輩たちから代々引き継いできたものであり、後世へとつなげていかなければならないもの。私はこの多様な専門知識を受け継ぎ、次世代へとつないでいくという重要な役割を担い、先輩や同僚そしてこれから防衛装備庁に入庁してくる未来の仲間たちとを、結び付けられるような存在になりたいと思っています。

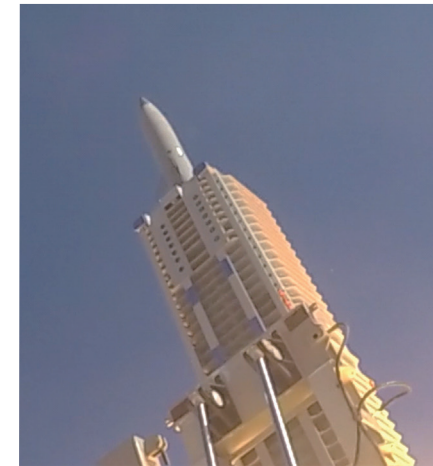


02 事業紹介 [スタンド・オフ・ミサイル]



島国である日本の安全を守り抜くための 遠距離ミサイル防衛能力の必要性。

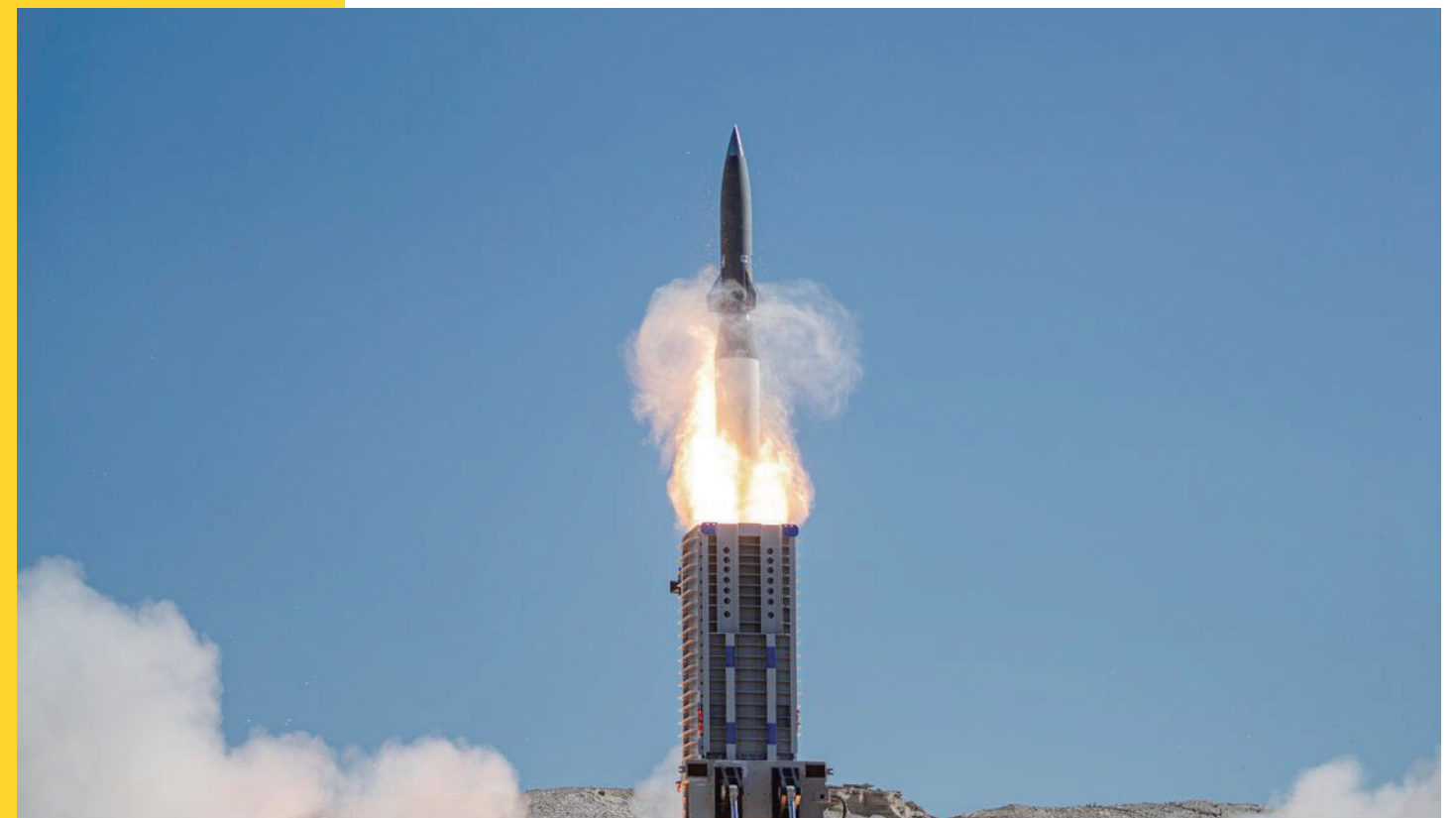
島嶼部を含む我が国に対する侵攻を防衛するためには、遠距離からの侵攻戦力の阻止・排除能力とともに、宇宙・サイバー・電磁波領域や陸・海・空の各領域における能力を融合した、領域横断戦略が重要です。また、ミサイル攻撃を含む侵攻に対してはミサイル防衛システムの構築・整備に加えて、必要最小限度の自衛措置としてスタンド・オフ防衛能力の獲得と活用が必須となります。侵攻国の艦艇や上陸部隊等に対し、対空ミサイル等の脅威圏外から対処するスタンド・オフ防衛力の獲得のため、長射程化と迎撃回避能力を高めたミサイルの開発が急務となっています。



我が国の安全保障の最前線、
島嶼部の防衛と抑止力強化のために。

侵攻部隊の脅威範囲外から攻撃を阻止する スタンド・オフ・ミサイル開発の方向性。

東西南北それぞれに約3,000kmに及ぶ我が国の領域には、広範囲にわたって多くの島嶼があり、守るべき国民の生命・身体・財産、領土・領海・領空や資源が存在します。一方、諸外国のレーダー探知範囲や各種ミサイルの射程・性能の向上は著しく、脅威が及ぶ範囲は侵攻部隊の周囲数百km以上となります。そのため、我が国の様々な地点から重層的に攻撃を阻止・排除できる能力獲得を目的に、地上・航空機・艦艇から発射可能なミサイル発射プラットフォームの多様化や、異なる特徴を持つスタンド・オフ・ミサイルの組み合わせ配備が開発の方向性となっています。



Interview

02 研究所

To participate in a project
研究室の外へ飛び出し、
米国での発射試験もリード。



最先端技術が形となり、
目の目を見る場所。

どれだけ高い技術でも、民生利用においてはなかなか注目されないものもあります。一方で、誘導弾などの防衛装備品は過酷な環境で使用されるものも多く、より高い技術が積極的に取り入れられています。最先端技術が早々に活用され、日本の未来を守ること。研究開発職として、果たせる使命やその影響力は大きいと感じました。ぜひここで、私の博士課程までの研究経験をアウトプットしたいと考えました。

航空装備研究所
誘導技術研究部 誘導制御研究室

●2012年入庁／電子工学系出身



技術で国民を守る。
防衛装備品の可能性を追求。

開発プロジェクトの技術的課題は、官民が協力して解決します。装備品開発に求められていることは、システムの最適化や運用者の利便性を考え抜く力です。識者の知見や最新技術に触れながら、試行錯誤を重ねる過程にやりがいを感じます。また、毎日過ごす中で課題解決の糸口や予防策への気づきを得ることも。議論を重ねながら課題に挑む日々は刺激的であり、四六時中考え続けるほど夢中になれる仕事に大きな意義を感じます。

長官官房装備開発官(統合装備担当)付
高速滑空弾開発室

●2008年入庁／理工学系出身

Interview

02 開発官

To participate in a project
気づけばプロジェクトの
ことばかり考えている、
仕事に夢中な自分がある。



大きな課題に直面した
時ほど、挑戦している
実感を強く得られる。



平和と安定の未来を築く。
技術で紡ぐ国際協力。

諸外国との共同開発を積極的に進め、装備品を通じた国際的な連携を強化。各国にとって日本との安全保障協力が重要な柱となる関係を築いていきたいです。平和と安定に寄与する技術開発を推進し、より高性能で信頼性の高いミサイル開発を行うことで、安全保障に貢献したいと考えています。また、新たな技術革新を取り入れることで、次世代の防衛装備品の基盤を築き、未来の防衛技術をリードする存在になることが目標です。

長官官房装備開発官(統合装備担当)付
スタンド・オフ対艦誘導弾開発室

●1998年入庁／情報工学系出身



To participate in a project

「この装備品の開発に
関わったのは私」と
胸を張って言えるように。



高度な技術で目標を捉える。
誘導弾開発の最前線。

私が担当するのは、ミサイルと呼ばれる誘導弾が目標を正確に捉え、命中させるためのセンサー「シーカ」の研究です。シーカは赤外線や電波を用いて目標を識別し、建物などの背景や他の物体と区別する役割を担います。そのため、性能を向上させることで、より複雑な環境下でも確実に目標を捉えることが可能になります。研究成果が試作品という形になり、発射試験で期待通りに目標へ向かう姿を目にした瞬間は、やりがいを感じます。

航空装備研究所
誘導技術研究部 シーカ研究室

●2020年入庁／情報工学系出身

03 事業紹介 [UUV^{Unmanned Underwater Vehicle} (水中無人機)]



将来のUUVに求められる課題。

現行のUUVではオペレータ近傍での活動に限定されており、用途やミッションも限られたものとなっているのが現状です。水中防衛力の確保に向けて将来のUUVにはさらなる無人化が求められます。その技術的難易度は高くなりますが、その分実現した際にはUUV単独での長期・長距離運用が可能となり、革新的な防衛力強化につながります。今後、より複雑かつ多岐にわたるミッションへの貢献や長期運用データの取得なども期待されます。

侵攻対応強化に向けた各種無人機の開発。

安全保障に不可欠な、
最速かつ多角的な防衛策の強化。

侵攻への対応に求められるもの。

東西南北に渡り約3,000kmに及ぶ我が国領域には、広範囲にわたり多くの島嶼を有しており、そこには守り抜くべき国民の生命・身体・財産・領土・領海・領空や各種資源が存在しています。こうしたわが国への侵攻に的確に対処するためには、平素から安全保障環境に即した部隊の配置とともに、自衛隊による常時継続的な情報収集・警戒監視などにより、兆候の早期察知、また状況に応じて迅速な機動・展開を行うことが重要となります。

無人化・省人化で未来の防衛力強化。

限られた人員で最大限の効果が得られるよう、装備品の無人化や省人化を推進しています。現在、無人航空機(UAV)、水中無人機(UUV)、水上無人機(USV)、無人車両(UGV)等の各種無人装備の研究開発が進行中。戦闘様相を大きく変え得る無人装備や、省人化された装備品の実現は、効果的・効率的な防衛力強化に必要不可欠です。

無人アセット防衛能力の早期創生。

多様な任務に対応可能なUUV実現に向けて、モジュール交換可能な長期運用型UUVの研究も行います。長期間にわたる任務に従事し、警戒監視や海洋状況調査といった様々な作戦を遂行するUUVをモジュールの組み換えで速やかに創生することで、将来の脅威に迅速に対応可能となります。



Interview

03 研究所

艦艇装備研究所 水中対処技術研究部
無人航走体連携研究室

●2019年入庁／新領域科学系出身



装備の研究に携われることが
入庁の決め手。

就職活動を進めていく中で、理系として学んできたことこそが自分の強みであり、求められる役割だと感じるが増え研究職を志すようになりました。防衛装備庁を選んだのは、官公庁の中で最も研究に重きを置いていると感じられたからです。内々定をもらった民間企業と防衛装備庁で迷いましたが、必ず装備の研究に携われる防衛装備庁への入庁は夢と目標が合致する事から決断しました。



事例のないものを研究し、
成功へと導く。

長期運用型UUVの研究に取り組んでいます。これからのUUVには人に頼らず運用できることが求められているため、今までにない機能を数多く採用する必要があり、シミュレーションや実海域試験で効果を検証します。試験が成功したり、一定の成果が得られたりした時には仕事の喜びを感じます。製造会社や試験時の作業船の方々など、組織の枠を超え多くの人と一緒に協力し合えることもやりがいです。



防衛装備庁に入庁し、
必ず叶えたい夢ができた。

UUVの研究に携わったことで、将来、大型UUVが装備化され部隊に配備されることが目標となりました。また、現在、UUVだけでなく水中通信に関する研究にも携わっています。水中通信については技術的にも課題が多く大変さを感じることもありますが、実現すれば水中装備の効果的な運用が期待でき、任務の幅を広げられるものです。今、取り組んでいる2つの研究は、必ず叶えたい夢であり実現を目指しています。



長官官房 装備開発官(艦船装備担当)付
艦船装備第5開発室

●1998年入庁／制御工学系出身



Interview

03 開発官

子どもの頃に憧れた世界で、
未踏の領域へ挑む。

幼い頃から科学技術に興味があり、研究職に憧れていました。前職で商船の推進性能研究を担当し、艦艇に関心を持ったことから艦艇装備研究所を見学。その際、海上自衛隊の防衛装備品について説明を受け、艦艇と商船の違いや海中で使用する潜水艦に興味深さを覚えました。電波が通じない環境で使用する潜水艦に関わる分野は、最先端の研究領域であると確信したことから、防衛装備庁への就職を決意しました。



未知を形に。アイデアをもとに、
未来を切り拓く。

私は大型UUVの研究開発を担当しています。大型UUVは各国が研究開発を競い合う新しい装備品です。新たな装備品の研究開発において、運用をイメージして技術的アイデアを考案、具現化していくプロセスに魅力を感じています。特に、自ら提案した内容が試作品で期待通りの成果を上げた瞬間は痛快です。またUUVとUSV(水上無人機)の連携技術に関して国際学会で発表する機会があり、自らを成長させる大きな挑戦となりました。



進んで研究環境を革新し、
次世代とともに歩む。

研究活動は常に挑戦の連続であり、その成果を最大化するには研究課題に興味を持てる環境が重要です。今後は、先輩が自ら研究課題を見つけ主体的に研究に取り組めるような、フラットな職場環境の構築に貢献したいと考えています。また、留学制度を活用して防衛大学校で修士号を取得する際に学んだ自衛官の思考を活かし、防衛技術のさらなる発展に貢献していき、挑戦と技術力を持って未来へと進みたいです。



04 事業紹介 [次期戦闘機]



グローバルな環境で、最新防衛の要を創り出す。

国際機関と多彩な有識者との連携を通し、次世代の技術を追求。

国際機関で行うグローバルな開発。

我が国の防衛において要となる航空優勢の確保のため、国内・国外における連携範囲を拡大。2020年には航空機全体のインテグレーションを行う機体担当企業として三菱重工株式会社と契約。そして2022年には日本・イギリス・イタリア3カ国首脳の合意のもと、グローバル戦闘航空プログラム(GCAP)を発表。3カ国の技術を結集し、開発コストやリスクを分散しながら、優れた航空機を開発する体制を構築しています。

多彩な知見を得られるフィールド。

現場ではGCAP加盟の3カ国から派遣された職員に加え、技術のエキスパートである多数の技官も参画。IT環境や高度保全環境の整備に欠かせない人員だけでなく、実際に戦闘機を運用する自衛官や英伊の軍人からの知見も得る環境を整えています。グローバルかつ多彩な視点を学びながら、次世代の航空優勢保持に欠かせない新たな戦闘機開発を担えるのが、この事業の特徴です。

社会全体への高い波及効果。

本格的な最新鋭戦闘機の開発は、社会全般における幅広い波及効果が期待されます。例えば、高性能レーダを起点に、次世代衛星通信開発技術や、ワイヤレス給電技術の開発へ展開。ステルス技術の開発から、自動運転用レーダや自立航空管制システムへの応用。さらに一体化ファスナレス構造の確立から複合材旅客機や大規模複合材建築など、社会生活のさらなる技術革新にも影響を与えます。

航空優勢と戦闘機の役割。

「航空優勢」とは、武力攻撃の発生時に味方の航空機が大規模な妨害を受けることなく、諸作戦を遂行できる状態のこと。航空優勢の確保は、空域下での海上作戦・陸上作戦の効果的な遂行を可能にする、防衛の要といえます。反対に「航空優勢」を失えば、諸作戦の運用自体が困難に。このため、戦闘機が我が国周辺空域に迅速に展開し、より遠方で敵の攻撃に対処できる体制が極めて重要です。



04 研究所

航空装備研究所 航空機技術研究部
航空機システム・無人機知能化研究室

●2017年入庁／航空宇宙工学系出身



To participate in a project

AI技術も駆使しながら、
日本の防衛力を高める。

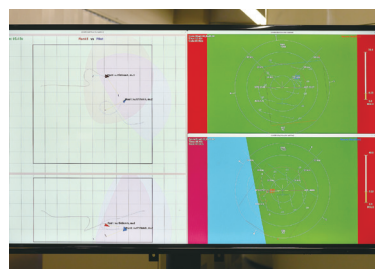
一人のエンジニアとして、
日本の防衛力に寄与。

航空宇宙工学を専攻していたこともあり、私にとって安全保障は身近な分野でした。その上で、民間企業ではなく当庁を選びました。特定の装備品や技術に特化して設計・製造の細部に関わるのも、興味深いものがあります。しかし私には、エンジニアとして最先端技術に触れながらも、より広い視点で将来の防衛力形成に携わりたいという思いが強かったのです。当庁の研究職でなら、その夢を叶えられると考えました。



特殊な状況下でのAI活用に
関われる面白さ。

無人機や戦闘機といった航空装備品に適用するためのAI学習を進める瞬間は、大きな挑戦の一つかもしれません。空戦などでの戦術的な行動判断は、AIの中でもかなり特殊なシチュエーションです。そのため既存の研究論文のアルゴリズムをそのまま活かしにくいことも多く、場面に応じてカスタマイズしなければなりません。私自身もプログラミングしながら何度も仮説検証し、試行錯誤の末、技術を高めています。



防衛省だからこそできる仕事に、
挑戦し続けたい。

将来振り返った時に、「我が国の無人装備品の発展に大きく貢献できた」と胸を張れるような仕事をしたいと考えています。これまでも自分の携わった装備品が世に出ており、その誕生の瞬間には一番のやりがいを感じていました。防衛省に所属しているからこそ成し遂げられる仕事もたくさんあります。そこに「自分が挑戦したいこと」をかけ合わせて考えると、当庁は唯一無二の職場だと強く感じています。



プロジェクト管理部 事業監理官
(次期戦闘機担当)付

●2006年入庁／電子工学系出身



To participate in a project

未来を見据えた
技術革新で、
安全と平和を守る。

04 事業監理官

最先端技術で未来を守る。
光技術から広がる可能性。

大学と大学院で電子工学を専攻し、光学材料の評価に関する研究をしていました。そんな中、防衛装備庁の説明を聞く機会があり、最先端技術を通じて国の安全を支える任務に感銘を受けると同時に、社会的意義の大きさに魅力を感じました。特に自身の専門分野に近いレーザシステムや赤外線センサーシステムの開発に携わるチャンスがあることが入庁の決め手となりました。



文化や考え方の違いを越え、
共通の未来を築く。

次世代戦闘機を開発する国際共同プログラム(GCAP)で、戦闘機に搭載されるミッションシステムの設計や技術開発を担当しています。英語によるコミュニケーションや考えの違いにより海外の技術者と意見が衝突する場面もありますが、議論を重ね合意を得るプロセスにやりがいを感じています。異なる文化や考え方の違いを乗り越え、共通の目標を追求する経験は、私自身の成長につながっています。



目指す先は、
防衛技術のエキスパート。

防衛装備庁ではスケールの大きいプロジェクトへの参加を通じ、専門分野の知識を深める機会があります。また、異文化コミュニケーションに基づくプロジェクトマネジメントを磨き、未知の課題に挑み続けることが可能です。この環境で私が目指す姿は、国際共同研究で防衛技術のエキスパートになることです。これまで培った知識や経験を活かし、国の安全保障と平和に寄与する技術者としてさらなる高みを目指します。



研究所紹介

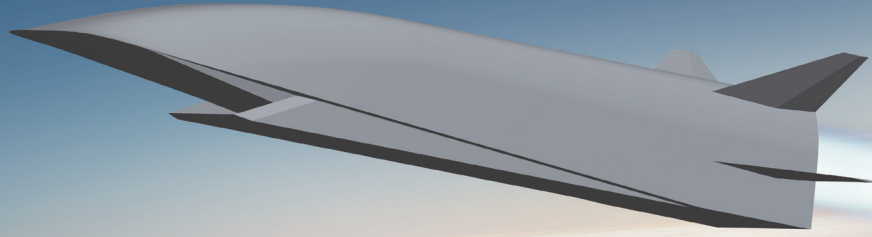
航空・艦艇・陸上・新世代の各研究所では、それぞれの専門領域における研究職技官が調査研究や試験評価を推進しています。

Research Center

Air Systems Research Center

航空装備研究所

航空装備研究所は、航空機及び航空機用機器並びに、無人航空機の機体システム、エンジン、誘導武器に関する研究や試験評価等を行っています。宇宙航空研究開発機構(JAXA)や米国空軍研究所(AFRL)等の国内外研究機関とも協力体制を構築し、要素研究やシステム研究に取り組んでいます。



Naval Systems Research Center

艦艇装備研究所

艦艇装備研究所は、艦艇の船体、船舶用機器、音響器材、磁気器材、掃海器材等に関する研究や試験評価等を行っています。海洋無人機の早期戦力化、ソナーシステムの最適化、海洋ビークルのステルス能力向上を大きな目標として、国内外の研究機関とも連携しながら研究に取り組んでいます。



Ground Systems Research Center

陸上装備研究所

陸上装備研究所は、火器、弾薬、耐弾・耐爆、車両、施設器材、CBRN*対処技術、個人装具等の研究や試験評価等を行っています。レールガンや無人車両といった将来の装備品開発では、各自衛隊を含む防衛省内の関係機関と連携し、先端技術を有する国内外の研究機関とも協力して研究を進めています。

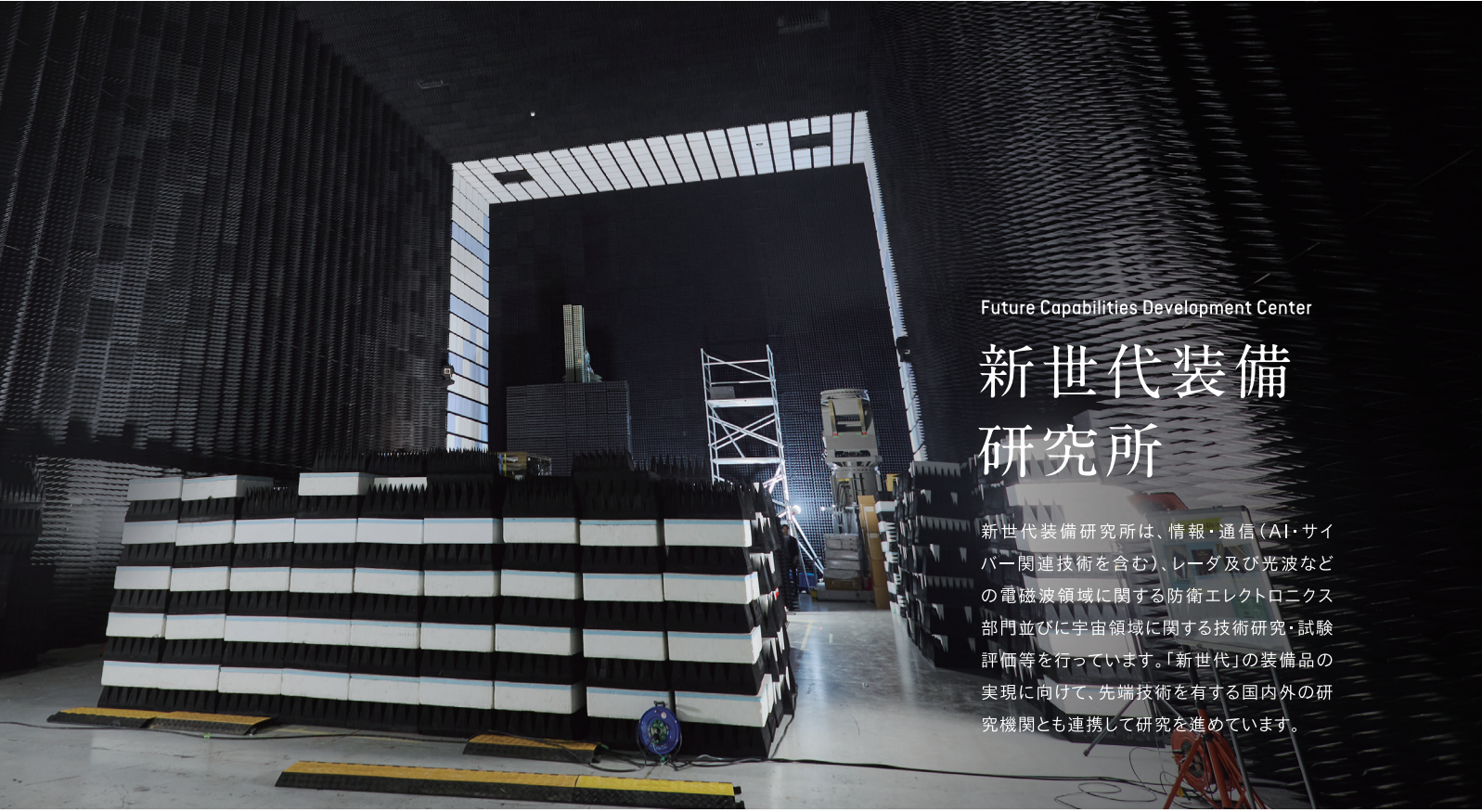
※CBRN: Chemical(化学剤)、Biological(生物剤)、Radiological(放射線)、Nuclear(核)



Future Capabilities Development Center

新世代装備研究所

新世代装備研究所は、情報・通信(AI・サイバー関連技術を含む)、レーダ及び光波などの電磁波領域に関する防衛エレクトロニクス部門並びに宇宙領域に関する技術研究・試験評価等を行っています。「新世代」の装備品の実現に向けて、先端技術を有する国内外の研究機関とも連携して研究を進めています。

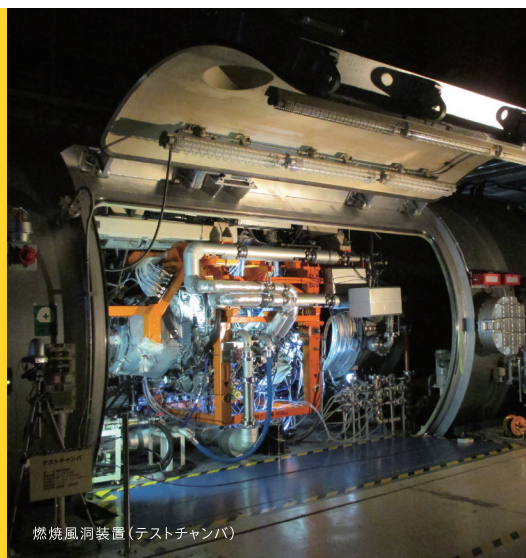


試験場

防衛装備庁では、大規模な試験等を安全かつ効率的に実施し、その試験データを正確に評価するため、国内に千歳・下北・岐阜の3つの試験場を所有しています。

千歳試験場

千歳試験場は、我が国最大のエンジン高空性能試験装置や三音速風洞装置等を有しています。また、陸上装備においては、様々な車両走行性能を評価する車両定地試験施設を有しており、数多くの装備品の創製に不可欠な施設です。



燃焼風洞装置 (テストチャンバ)



車両定地試験施設

空力推進研究施設

下北試験場

青森県下北郡東通村に所在する下北試験場は、火器及び弾薬類の弾道性能のデータ取得に必要な高精度の計測器材が充実し、各種火砲による射撃試験等の実施が可能な国内有数の試験場です。また、試験支援や安全管理の要領等について、効率的な試験を実施するための手法の検討を行っています。



射撃試験における試験配置及び弾着点



爆破試験における爆破の状況

岐阜試験場

岐阜県各務原市の航空自衛隊岐阜基地内に所在する岐阜試験場は、航空機・航空機搭載用機器の性能に関する飛行試験、航空機搭載誘導武器の性能評価試験を実施しています。また、各研究所が行う装備品の試験研究支援も行っています。



試験計測航空機BK-117



テレメータ計測車

支所

航空装備・艦艇装備・新世代装備の各研究所では、各専門領域の研究、装備品開発、試験評価を行うフィールドとして、国内に合計5ヶ所の支所を所有しています。



土浦支所全景



ロケットモータの燃焼試験

土浦支所

〔航空装備研究所〕

土浦支所では、誘導兵器の構成要素であるロケットモータの燃焼試験や環境試験の実施を通じて、その性能確認や信頼性向上に貢献し、防衛の装備改良を支援しています。



射場



誘導武器の発射試験

新島支所

〔航空装備研究所〕

国内唯一の誘導武器専用の発射試験場が新島支所の特徴です。国内で開発されたほとんどの誘導武器は、ここでの発射試験を経て装備化され、実戦配備されています。



川崎支所全景

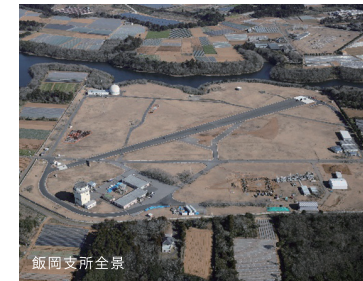


試験施設

川崎支所

〔艦艇装備研究所〕

川崎支所では、艦艇や車両等の磁気低減、航空機等による磁気探知、水中電界による目標探知等、磁気及び水中電界などに関する研究を行っています。また、これらの技術を用いた装備の開発や改善にも伺います。



飯岡支所全景



RCS計測用パイロンと実大規模模型

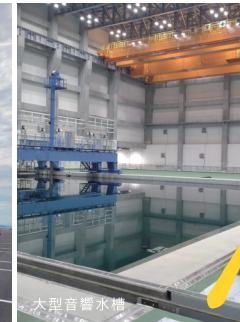
飯岡支所

〔新世代装備研究所〕

飯岡支所では、国内唯一の高精度RCS※計測場や可搬型計測機器を利用して、自衛隊の航空機・艦艇・車両等の電磁波計測技術に関する研究を行っています。※RCS: Radar Cross Section (レーダ反射断面積)



水中無人機試験棟



大型音響水槽

岩国海洋環境試験評価サテライト

〔艦艇装備研究所〕

海洋無人機等の試験評価が可能な幅35m、奥行30m、深さ11mからなる、我が国最大級の大規模音響水槽や音響環境を含む多様な状況を模擬可能なシミュレーション装置等により試験を行っています。

Branch Office

Secondment — 他省庁への出向職員



内閣官房

防衛政策の連携強化で、 国家の安全を支える。

現在、内閣官房に出向し、総括調整業務や防衛分野の企画調整業務などに従事しています。後者では、内閣官房の視点から防衛省内の関係各部署と調整を図り、防衛省との連携体制を構築する役割を担っています。これは防衛省と内閣官房の両者の強みを最大限に引き出し、国家全体の安全保障政策が一体となって進められる仕組み作りです。両組織のプロジェクトが相乗効果を生み、成果が最大化することに貢献しています。

他省庁でも活かされる、 工学的視点。

防衛装備庁では、プロジェクトの統括や全体最適化に加え、演習場などの現場に赴き研究開発の指揮を執ることが求められます。一方、他省庁では現場の業務を国立研究開発法人などに任せることが多く、内閣官房でも全体を俯瞰し政策を統括する役割が中心です。ただし、理系出身者が関わるいずれのプロジェクトも工学的視点は不可欠ですから、防衛装備庁で培った現場経験や技術的知見が出向先の業務でも大いに活用されています。



Profile

内閣官房 出向中
総括調整業務や防衛分野の企画調整業務を担当し、安全保障政策の仕組みづくりなどを推進。
●2014年入庁／機械工学系出身

行政官としても、 技術者としても。

帰庁後は、出向先での経験を活かし、防衛政策が他省庁の政策と密接に結びつくような取り組みを推進し、国家安全保障において、より総合的な成果を挙げられる仕組みを構築したいと考えています。また、技術的な面では、私の専門分野である無人機と宇宙に関する知見を活かし、日本の安全保障において重要性を増すこれらの分野において、技術革新と政策目標を結びつけ、実効性の高いプロジェクトを推進するマネージャーとして活躍したいと考えています。



Cabinet Secretariat

Study abroad — 海外への留学職員



優れた装備品の実現を目指し、 最先端技術の習得へ。

指揮通信システムの研究開発に携わる中で、最先端技術を取り入れ、より優れた装備品を実現したいという思いが強まりました。将来の研究開発の中核を担うためには、技術的な専門知識のさらなる習得が必要だと考え、留学を決意しました。光無線通信分野の世界的な研究拠点であるエディンバラ大学にて最先端の研究に取り組み、今後の防衛装備品の発展に貢献する基盤を築くことを目指しました。

最新技術の有用性を実証し、 防衛の未来に貢献。

留学先では、光無線センサネットワーク技術を研究テーマに設定。シミュレーションによる理論検証から回路設計、試作した送受信機を用いた実験を実施し、新たな受信技術の有用性を実証しました。この技術により、従来の電波に加えて光無線通信による強固な情報通信基盤を構築でき、自衛隊の運用能力向上に貢献できます。光無線通信は、複雑な戦闘状況での情報共有を可能にする技術です。

留学の経験を活かし、 防衛技術を次のステージへ。

留学を通じて専門的な技術の習得だけでなく、計画立案やタスク管理、器材の調達といった研究プロジェクト遂行能力も養いました。また、大学寮に住んでいたため、世界各国から来た留学生との交流が良リフレッシュとなり、研究活動に専念できたと感じています。今後は、留学で得た知見を活かし、より高度で信頼性の高い防衛技術を開発し、次世代の防衛装備品の基盤を築くことを目指します。



Profile

留学先：イギリス
新世代装備研究所 AI・サイバーネットワーク研究部 通信ネットワーク研究室
●2014年入庁／電気工学系出身

Study abroad system

留学制度

職員の各専門分野における高度な知識の習得、プロジェクトマネージャー能力のかん養及び問題解決能力の取得を図るため、国内外の大学院へ留学する研修制度があります。

▶ 最近の例として、以下の大学院に留学しております。

国外留学先 ● Georgia Institute of Technology, ● Northeastern University, ● Rice University, ● University of London etc. (アルファベット順)

キャリアステップ

初任研修を修了後、各研究所等へ配属。配属後は、配属先において各装備品の研究・開発・設計や試験評価に携わる中で、各分野の研究職としての技術と素養を身につけられます。その後は、装備技術に係る各種政策の企画・立案、国内外への留学、海外勤務、他省庁への出向、民間企業との人事交流等、多彩な経験を通じてキャリアアップの道が開かれています。



研究員級

現在は、通信機器のネットワーク化及び、通信・対通信妨害に関わる技術研究とその試験業務に携わっています。実際の装備品に触れて、部隊の方々とともに仕事をする中で、我々の研究が国防を担っていることを実感できるのがこの仕事の最大の魅力であり、やりがいです。

新世代装備研究所 AI・サイバーネットワーク研究部 通信ネットワーク研究室 研究員
●2021年入庁／情報工学系出身



課長補佐級

現在は、研究職技官研修の企画立案や調整業務に携わっています。研修内容の充実と、職員の知識・技能修得と専門性向上の支援が主な仕事です。企画した研修を通して、研修生がスキルアップして成長した姿を見られることに、やりがいを感じております。

長官官房人事官付 人材育成センター
●2010年入庁／応用化学系出身



研究室長級

現在は、航空用エンジンとしてジェットエンジンやローターティング・デトネーション・エンジンの研究事業に従事しています。近年は、国際共同開発や共同研究の割合が格段に増えており、工学の知識はもちろん英語力を磨く機会も増え、やりがいを感じます。

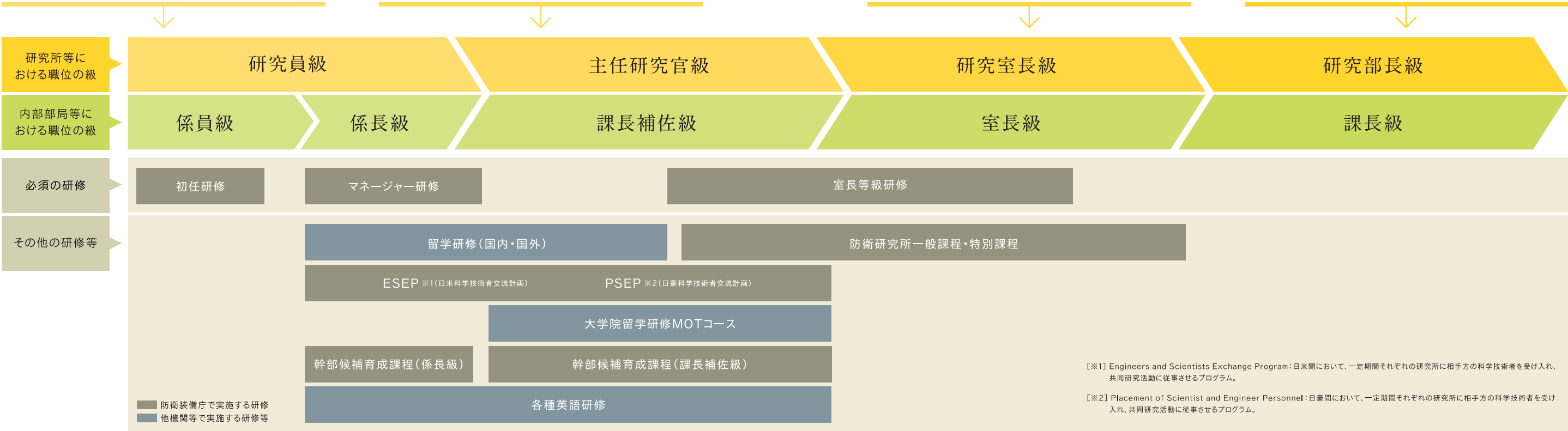
航空装備研究所 エンジン技術研究部 エンジン先進要素研究室
●2000年入庁／航空工学系出身



課長級

現在は、レーザーやレールガン、無人装備など、将来の新たな装備品に関わる研究開発計画の作成・管理に携わっています。MOT研修の経験により、「企業を動かすのは人である」と改めて認識しました。官民のコミュニケーションとチームワークの重要性を実感しています。

技術戦略部 技術計画官
●1992年入庁／機械工学系出身



福利厚生

不妊治療休暇

不妊治療に係る通院等のため年間5日（場合により10日）の範囲内で休暇を取得できる制度です。

産前・産後休暇

出産予定日の前6週から産後8週までの期間、休暇を取得できる制度です。

配偶者の出産休暇

男性職員が妻の出産に伴う入退院の付き添い等を行うために2日間休暇を取得できる制度です。

育児参加のための休暇

男性職員が妻の産前産後期間中に出産に係る子または小学校就学前の子を養育するために5日間休暇を取得できる制度です。

子の看護休暇

小学校就学前の子を看護するために年間5日（場合により10日）の範囲内で休暇を取得できる制度です。

育児休業

子が3歳に達するまで、子を養育するために認められる休業制度です。

育児短縮時間勤務

小学校就学前の子を養育するために、勤務時間を1日3時間55分（週19時間35分）等に短縮できる制度です。

育児時間

1日の勤務時間の一部（2時間まで）を小学校就学前の子の養育のために充てられる制度です。

WORK LIFE BALANCE

仕事と家庭生活の 両立支援制度

職員の仕事と育児・介護等を両立するための様々な制度があり、多くの職員が活用しています。
（あくまでも一例です。）

Welfare Benefits

介護休暇

配偶者、父母、子、配偶者の父母等の介護のため、6ヶ月の期間内で必要と認められる期間、休暇を取得できる制度です。

早出遅出勤務

養育・育児または介護等のため始業・終業時刻の変更を認める制度です。

フレックスタイム制

勤務時間を5～22時の間で（コアタイムあり）変更ができる制度です。

テレワーク

業務効率の向上、負担軽減及び両立支援を図るため、自宅勤務が可能な制度です。

保育園（市谷地区）

仕事と育児の両立を支援するため、防衛省敷地内に保育施設を併設しています。通勤時の送り迎えの負担を軽減し、万が一の際にもすぐに駆けつけることができる環境を整えることで、働く保護者の方々が安心して業務専念できる体制を整えています。

食堂（市谷地区）

充実した食事環境を整えた食堂には、人気のチェーン店である牛丼屋やうどん屋が入店。昼時には、お弁当の販売も行われ、美味しい食事を求める職員で活気に溢れています。リーズナブルな価格と豊富なメニューで、毎日の食事を楽しむことができます。

部活動（市谷地区）

防衛省内には、和室や体育館が設けられており、居合道や茶道などの部活動が複数活動しております。業務とは関係ないところで思わぬコネクションができたりします。

募集要項



総合職

採用予定区分

国家公務員採用総合職試験 (院卒者試験・大卒程度試験)	「工学」「化学・生物・薬学」「数理科学・物理・地球科学」「デジタル」 「農業農村工学」 ※農業系区分は「農業農村工学」のみとなりますので、ご注意ください
--------------------------------	---

採用実績〔区分別の採用実績〕

採用年度	国家公務員採用総合職試験(院卒者試験・大卒程度試験)				
	工学	化学・生物・薬学	数理科学・物理・地球科学	デジタル	農業農村工学
2020年(R2)	12(3)	4(1)	1(0)	－	－
2021年(R3)	13(0)	0(0)	1(0)	－	－
2022年(R4)	15(1)	2(2)	0(0)	－	－
2023年(R5)	10(0)	3(0)	1(0)	0(0)	－
2024年(R6)	11(1)	3(0)	0(0)	3(0)	－

1.()内は女性の採用数で内数。2.「－」は当該年度にその区分での採用者がいなかったことを示す。3.「デジタル」区分は2022年度試験より新設。

主な勤務条件〔2025/1/1現在〕

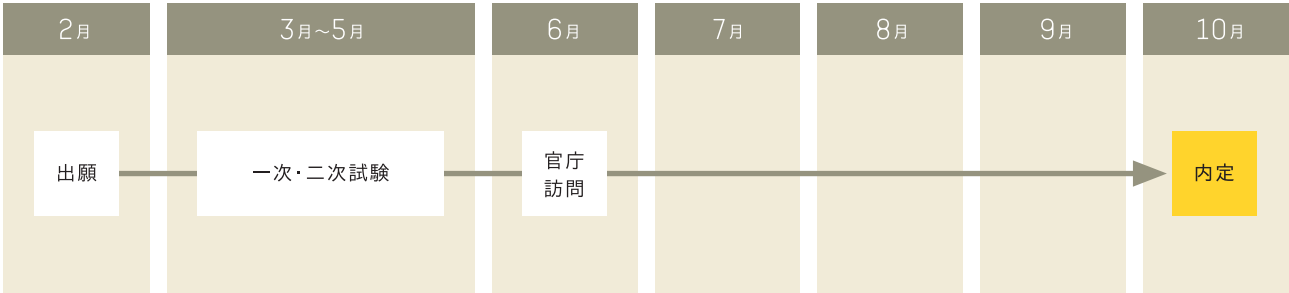
採用時の給与は、階級、勤務地等によって異なります。表は、新規卒業者の研究職技官が本庁(市谷地区)に勤務の場合(地域手当、本府省業務調整手当を含む。)

院卒者試験 博士卒	研究職俸給表 2級33号俸の場合	369,760円
院卒者試験 修士卒	研究職俸給表 2級17号俸の場合	332,200円
大学程度試験 学士卒	研究職俸給表 2級5号俸の場合	304,240円

手当	住居手当、通勤手当、扶養手当、超過勤務手当、期末・勤勉手当(いわゆるボーナス)等
勤務時間	1日7時間45分(原則として土曜日、日曜日、祝祭日は休み)
休暇	年20日の年次休暇(4月1日採用の場合、採用の年は15日)、病気休暇、介護休暇、特別休暇(夏季、年末年始、結婚、忌引き、ボランティアなど)
その他	育児休暇、育児短時間勤務、早出遅出勤務、フレックスタイム制等の体制も整っており、活用している職員が多くいます。

採用スケジュール

〔国家公務員採用総合職試験〕



一般職

採用予定区分

国家公務員採用一般職試験(大学程度試験)	「デジタル・電気・電子」「機械」「物理」「化学」
国家公務員採用一般職試験(高卒者試験)	「技術」

採用実績〔区分別の採用実績〕

採用年度	大卒程度試験				高卒者試験
	デジタル・電気・電子	機械	物理	化学	技術
	研究職採用	研究職採用			
2020年(R2)	1(0)	4(0)	－	－	1(0)
2021年(R3)	1(0)	2(0)	－	－	－
2022年(R4)	2(0)	1(0)	－	－	1(0)
2023年(R5)	2(1)	5(0)	0(0)	0(0)	7(1)
2024年(R6)	1(0)	1(0)	1(0)	1(1)	1(0)

1.()内は女性の採用数で内数。2.「－」は当該年度にその区分での採用者がいなかったことを示す。

主な勤務条件〔2025/1/1現在〕

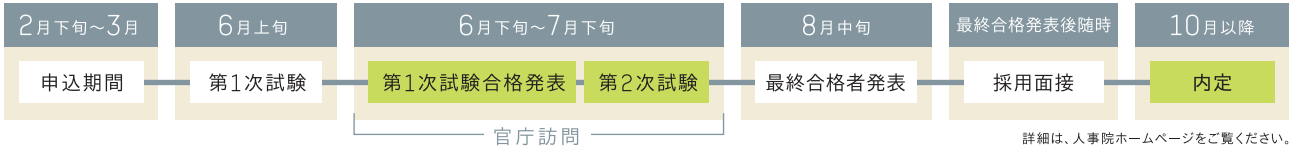
採用時の給与は、階級、勤務地等によって異なります。表は、新規卒業者の研究職技官が本庁(市谷地区)に勤務の場合(地域手当、本府省業務調整手当を含む。)

一般職(大卒程度)	研究職俸給表 1級25号俸の場合	278,640円
一般職(高卒者)	研究職俸給表 1級5号俸の場合	233,280円

手当	住居手当、通勤手当、扶養手当、超過勤務手当、期末・勤勉手当(いわゆるボーナス)等
勤務時間	1日7時間45分(原則として土曜日、日曜日、祝祭日は休み)
休暇	年20日の年次休暇(4月1日採用の場合、採用の年は15日)、病気休暇、介護休暇、特別休暇(夏季、年末年始、結婚、忌引き、ボランティアなど)
その他	育児休暇、育児短時間勤務、早出遅出勤務、フレックスタイム制等の体制も整っており、活用している職員が多くいます。

採用スケジュール

〔国家公務員採用一般職(大卒程度試験)〕



〔国家公務員採用一般職(高卒者試験)〕

